



(般若心経・正観音)

日々好日



弘法大師



日々好日

六六四号

(令和六年六月発行)

円安とか物価高だとか言いながらもゴールデンウィークには、海外旅行に出かけたり名所旧跡を訪れたり、各地のイベントに参加したりと心身をリフレッシュされた方は多い。こうしてその後のそれぞれの課題に取り組むことが出来れば連休の効果は大きいであろう。

四季折々の風物の中でも瑞々しい新緑のこの季節は、溜渇した生命に潤いをもたらせ蘇らせてくれるかのようでも好きな季節です。心も和みます。

「曉月朝風、情塵を洗う」とか、

閑林に独坐す 草堂の暁

三宝の声を一鳥に聞く

一鳥声あり 人心あり

声心雲水俱に了々



大師のこの詩からも自然が人を育て心を清め、仏ごころを悟らしめることを教えられているように思います。また、「山川草木悉有佛性」とか「草木国土悉皆成仏」という佛語をなんの抵抗もなく受け入れることが出来るのも、この季節がふさわしいように思えてならない。

弘法大師のお言葉

「山毫溟墨を点ず。乾坤は経籍の箱なり」 (性霊集巻第一)

(山の如き大きな筆と、海の如き大量の墨をもつて書かれたお経が、天を蓋とし、地を底とする大きな箱に満ち満ちている)



## 父の日

六月には昨年、生誕一二五〇年を奉祝した弘法大師空海さまのご誕生の日(十五日)があります。

そして、第三日曜が父の日だという。母の日も父の日も米国發祥由来で、終戦後我国でも父母に感謝の日として定着しつつあるようですが、母の日に比べて認知度は低いようです。それは認知度というより家庭の中での存在のの違いというべきかもしれません。

それはさておき私共僧侶は、得度式の中で氏神様と両親に分かれの挨拶をいたします。氏神様に分かれを告げて郷里を去り、父母との縁を断ち家を出るということです。それは一切衆生を父母だと受け止めなさいということだと理解しています。

そして、真言宗の僧侶にとってはお大師様が大いなる父であるという思いは強いものがあります。

今日、檀家さんの葬儀のはじめに剃髪の儀があり、出家の偈文をお唱えします。

流転三界中 恩愛不能断  
棄恩入無為 眞実報恩者



これは三界(欲界・色界・無色界)の中で何度も生死を繰り返しつつも断ち難い父母の恩愛を断ち棄て、何物にもとらわれない境地に入ることこそが眞実の報恩者であるということです。これは檀信徒の方々も出家し僧となつて修行を重ねて仏の浄土に赴くことを教えてください。

得度をし、僧侶となり葬儀の度にこうした偈文をお唱

えしつつも、父母の養育の恩に報いようとしている中途半端な僧であることを否定することはできません。

寺報の先月号でちよつと触れた父母恩重經には次のような一節があります。

「父母の為に心力を尽くしてあらゆる佳味、美音、妙衣、車駕、宮室等を供養して、父母をして一生遊樂に飽かしむるとも、(略)仁心ありて施しを行い、礼式ありて身を檢きしめ、柔和にして辱めを忍び、勉強にして徳に進み、意を寂靜に潜め、志を學問に励ます者と雖も、一たび酒色に溺るれば悪魔忽ちに隙を伺い、妖魅すなわち便りを得て、財を惜しまず情を蕩かし、忿りを発させ、怠りを増させ心を乱し智を晦まして、行いを禽獸に等しくするに至ればなり。」

大衆よ、古より今に及ぶまで、之によりて身を亡ぼし家を滅ぼし、君を危うくし親を辱めざるはなし。云々」

正しく古より今に及ぶまで同様の愚かで恥ずかしいことが多くの職域で行われていることを毎日のようにマスコミは報じています。こうした禽獸にも等しい愚かな行為を止めさせるために佛法僧の三宝を信じさせることが、父母の恩に報いることだと説かれています。

幸いに父は出家者であり母も信篤く身を亡ぼすことはありませんでした。

「孝行したい時分には親はなし」と申します。親存命時は子も子育て中で父母にこころを寄せる余裕がなかったということになるのでしょうか。

そうした中で、父母の存命中に万徳院に本堂が建ち、龍門寺も千手觀音を新造して復興に向けて動き始めており、両寺院の復興の様を見届けての遷化でしたから、私にとつては親孝行の眞似事が出来たことは仕合せなことであつたと思つています。

これからも大いなる父、弘法大師空海様を頼り、信じ仰ぎ、一切衆生を實の親の如くに尊び尽くしてまいりた

い。それが檀信徒にとってもこの老骨にとつても信頼しえる父母兄弟姉妹が如くにしての日々であればこんな嬉しいことはありません。

私も父母の齢に近づきつつありますが、十一才差であつた父の米寿、母の喜寿を祝つた時の父母の顔が、母の日を経、父の日が近付くと昨日のこのように思い出されます。

晩年の父の法話の中には必ずと言っていいほどに母親のことが繰り返して登場しているという記憶があります。私の法話にはいまのところ母は登場していません。母を語るのはもう少し先のことになるのでしょうか。

大いなる父、お大師様の御誕生の日を心してお迎えし、お祝い致しますよう。

高野山での小僧時代、大師様の御誕生をお祝する六月十五日の青葉祭りは僧俗あげての大師音頭を踊りながらのお練りに参加の師僧の軽妙な踊り姿は今に目に浮かびます。この師もまた、紛うことなき生涯の父である。



## 万徳院のことども

先月号で吉川公の広島県北での動向と元長公による万徳院の創建などを見てまいりましたが、その万徳院はその地に天正二年（一五七四）から慶長五年（一六〇〇）岩国転封までのわずか二十数年間あつたにすぎません。

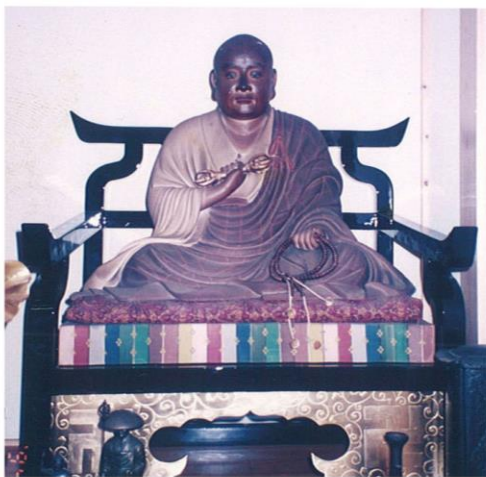
元長はこの寺の本尊は弘法大師で大日・釈迦・阿弥陀の三尊を安置して、宗派にとられない「十宗大望之寺」の建立を心がけておられたという。

元長公は吉川氏の菩提寺の一つ西禅寺という禅宗のお寺の住職と交流があり、百六十余通もの手紙のやりとりをしておられ、禅宗の教えに傾倒しておられたようすが、京都御室の仁和寺二十世の仁助法親王より弘法大師筆という法華経を贈られたことから、真言宗に執心されるようになったといわれています。

現在、万徳院に白紙金泥の法華経がありますが、これがその經典か定かではありませんが、什物帳には弘法大師筆と記載の法華経が、紺紙金泥の華嚴経とともに記載されています。

現在、万徳院安置の弘法大師像（坐高二尺五寸）が、その時の大師像なのかは判然としませんが堂々とした風格のある大師像である。

しかし、大日・釈迦・阿弥陀の三尊は現存したのか、しなかつたのかわかりません。岩国の万徳院には引き継がれてはいません。

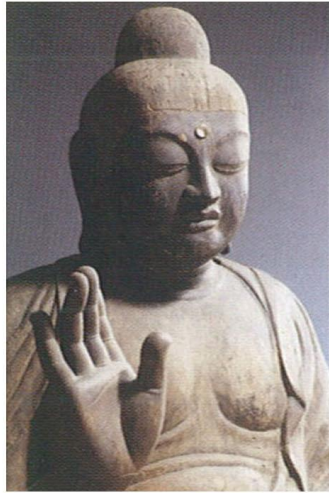


今一つ不可解なことは、岩国での万徳院は室町時代の寛正元年に再興されたという銘のある不動明王が本尊であるということだ。

万徳院は天正二年の創建だということなので創建時の御像ではありません。そこで考えられるのは吉川氏の岩国転封に際して万徳院も岩国に遷移しましたが、その時に何故か安芸国造の一族である凡（おおし）氏の氏寺であった九世紀初めの建立という福光寺という古寺の名を冠して、福光寺万徳院として来岩しているのです。

福光寺は最盛期には49の塔頭寺院を有し、三百石の領地があった寺院である。（北広島町教育委員会刊の「古保利薬師」より）

私はこの福光寺の諸仏を収蔵する古保利薬師を数度訪れ、薬師如来をはじめ千手観音・十一面観音・四天王など十一軀のいずれも国の重要文化財指定の諸仏を拝んでいます。平



安時代初頭の貞観佛とされるこの仏像群と、万徳院本尊とは制作年代に大きな隔たりがあることは一目瞭然です。この古保利薬師堂（収蔵庫）の入口の説明板に、福光寺は火災に遭い縁由が定かではないとあるのを目にしました。然るに古保利薬師の諸像には焼損の片鱗すら認められませんでした。

現在でもあれだけの法量の仏像を山寺の火災の際、無傷で運び出すことは不可能に近い。穿った見方が許されるなら、福光寺の諸仏とされる古保利薬師の諸佛は多くの塔頭寺院か、元長公創建の万徳院の末寺に擬せられて

いる龍門寺をはじめ数カ寺の諸佛の寄せ集めではないかという妄想のようなことを無碍に否定できない。

それが、現実味を帯びるのは行基菩薩作造と言う龍門寺の諸仏が一佛も岩国再興の寺院に傳えられていないことにも納得がいくのです。

したがって、万徳院の本尊不動明王も吉川氏にかわりのある室町時代に存在していたかかる寺院の仏像であるという想像がなりたちます。

元長公創建の新寺の万徳院が、平安時代にさかのぼる古利の福光寺という箔をつけて来岩したのだと言っても強ち間違いとはいえないでしょう。是によって天正時代創建の万徳院の本尊が室町時代に再興された尊像であることの説明がつきます。

この不動明王に加え軍荼利明王などの四大明王が加わり五大尊明王として更なる威光を加えるのは享保十八年（一七三三）のことです。

父俊澄が昭和五十七年に晋住記念に腐朽著しい五大尊を完全修復した際、各尊像の火焰光背の裏面に墨書されていた文言を挙げてみました。



奉再興不動明王尊像

奉新添経論

寛正三元庚辰九月二十八日

大願主 吉川駿河守藤原基経卿

当山別当 朝周阿闍梨耶

奉新添不動明王台座

大檀主 吉川候経永公嚴命建立之畢

享保八年三月吉祥日

時之執事 桂勘左衛門清久

当山八世 問津湛良法印代

降三世明王

経永公 運武長遠 寿算永久 如意吉祥

自施入淨財 造刻四大明王尊像安置

甘露軍荼利明王

経永公 運武長遠 寿算永久 如意吉祥

自施入淨財 造刻四大明王尊像安置

享保十八歲次癸丑 四月二十八日

總統檢事 槍田亦右衛門 光位

大威徳明王

萬歳如意満足 并武運長久 封域五穀豊熟矣

自放捨淨財

刻四大明王尊像安置于 当山秘密道場

金剛夜叉明王

右旨趣奉為

大檀主 吉川候経永公 武運永固 寿算長遠

如意大円満 并封内安全 五穀成就矣

自放捨淨財四大明王尊像安置于

当山秘密瑜伽場畢

總統檢事 槍田亦右衛門 光位

洛陽佛工 赤井幸助

享保十八歳

自現山 第十世 福光寺兼金剛院主秀詮

矜羯羅童子・制吒迦童子 法印 湛良代



このように施主、佛師、年代、造刻の旨趣がはっきりしているものは寺院の本尊として貴重で価値があります。不動明王に四大明王を新刻して五大尊とした当時の住職とそれに淨財を喜捨して協力した藩主経永公の功績は大なるものがあります。単独の不動明王は数知れずありますが、五大尊となれば近在ではその存在を知りませんが、五大尊明王は東寺・仁和寺・醍醐寺・大覚寺など真言宗の総大本山の像は著名です。万徳院の五大尊はこれらにくらべれば小像ですが、必見に値する完成度の高い尊像である。

毎月二十八日午前十時から護摩供をつとめております。城山の中腹、千石原のバス停の直下から参道を健脚ならば五分で山門に至ります。急坂ですが難所のお札所だと思ってお参り下さい。利益大です。

高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写經 六四二

二卷奉納

岩国市装束町四丁目

福島 松代殿

二卷奉納

岩国市南岩国町二丁目

沖本あつ子殿

一卷奉納

岩国市通津

吉岡 律子殿

(四月十一日〜五月十日奉納分)



佛教説話

五六七

両手に金銭を出せし男児

舍衛国に一の長者があり、一族の中から撰んで妻を迎えました。その妻、十月を経て男児を生みました。氣附けばその子は両手に金銭を持っていたのです。取り出せば再びそのことあり。幾度繰り返しても尽きることがなかったのです。

長者はその子を宝手と名付けました。歳月を経て少年となった宝手は親には孝をつくし、他人にも慈しみ深く接していました。多くの友人も出来て、在る時彼らと共に祇園精舎の中に入り、光明輝く日輪の如き仏を目にし、御足を礼拝して言いました。

「世尊、我が家にて施食供養をさせて頂きたく諸弟子と共にお越し頂けないでしょうか」と。

その時、仏弟子阿難は宝手に言いました。

「汝は未だ若者なり、供養会を設けんとすれば少なからず金銭が必要である。汝の家にその用意ありや」と。

これを聞いて宝手は両手を差し伸ばすに金銭が雨のように生じたのでした。

仏は阿難に告げ給いました。

「阿難よ。この金銭を取りて食材を求め供養会を為す用

意をいたせ」と。

こうして少年宝手の供養会は為され、仏を目の当たりにして父母も大いに感激したのでした。

宝手は父母に言いました。

「仏弟子となることをお許し下さい」と。

父母は宝手を愛念するも敢て反対をせず、共に仏のもとに至り宝手の出家を懇願するのでした。

仏は、「善く来たりぬ」と出家を許しました。その時、鬢髪は自ずから落ち法衣を身に着け沙門となり、精進するのでした。宝手比丘は時を経ずして阿羅漢の悟りを得たのでした。

阿難はそれを知つて仏の前に至り申しました。

「世尊、宝手比丘は先世にどのような福業を積んで、大長者の家に生まれて、しかもその両手に金銭あり、それを取れば再び生じ、佛世尊に遇い奉りて出家し、たちまちのうちに阿羅漢果を得ることが出来たのですか」と。

仏は阿難に告げられました。

「阿難よ、よく聞け、汝の為に分別しそのことを説かん。遙かな昔、波羅捺国に迦葉という仏あり、教化を普くし涅槃したまえり。

その国に迦翅という王あり、

王は迦葉佛の舍利を収め取りて

塔を建てたのである。その塔を

見て一の長者が深く随喜し金銭

を塔のもとに置いて去りました。

その功德により永く悪趣に墮ちることなく常に人中に生じることとなり、手掌より手を伸ばせば金銭が出るようになり、それが今もなお続いているのである。

その時の長者が、今の宝手比丘なのだ」と。

阿難ら、諸比丘は仏の説き給うを聞いて歡喜奉行すという。



## あとがき

数年ぶりに開催されるはずであった錦帯橋祭りの武者行列は雨天で中止になった。準備をされた方々は悔しい思いをされたことでしょう。天気ばかりは如何ともし難いことです。

五月五日のこどもの日のフレンドシップデーの米軍基地開放には、天候も良く十一万三千人の入場者があったという。

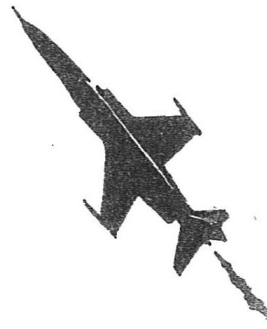
どうして、あえてこどもの日に子供たちに戦闘攻撃機を見せるのでしょうか。毎年疑問に思っています。私には戦争を讃美する行事に思えてならないのです。最新鋭の戦闘機を見せて国の平和とか防衛を考えさせるといふなら、五月三日の憲法記念日のほうがふさわしいように感じる私は異端児なのでしょうか。

「珠(数)を持てば善念生じ、

劍を把るは殺心の器」(宗秘論)

このお大師様のお言葉が心を過ります。

先にも書きましたが、六月十五日はお大師さまのご誕生日です。大師は幼年、泥土をもって仏を造り祀られたと言われています。尚、当日は稚児大師を奉安していただきます。御参詣お待ちしております。



発行者

高野山真言宗

宝池山 龍門寺

吉岡光昭

朝夕に

般若心経

唱うれば

楽々登る

苦の坂も

岩国市通津 3634 番地 3

☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

☎岩国 (0827) 38-4611 番